

## 生け贄としてのブタ

コンサルタント Info Box 津田 謙 二

古代の各民族の間で、全く横の連絡つまり伝承でなく、自然発生的に出現した習慣の中に野生動物の家畜化と共に“生け贄”“犠牲”を捧げる儀式がある。

その日暮らしに近い生活を送っていた古代人の毎日は、それこそ食を得ること、住処を得ること、子孫を育てることに追われており、その度に自然の厳しさ、威力を感じざるを得なかったに違いない。こうした日常生活の中での幸運…食糧が得られた、家畜がふえた…かと思うと不測の事態としての自然災害や病気やけが、他動物による食糧の損失や危害といった生活や身体への危機に対し、神、宗教といった明確な形での意識はないにしても、何かしら超自然の大きな力が働いていると考えたであろう。その偉大な力に対して畏れの気持ちを抱き、時には感謝の、時には恐れ、そして祈りの気持ちをあらわすために、おのれの持つ貴重なもの、価値あるものを捧げ、おのれの身のそして一族の安全をはかろうとする。これは世界中の人類に共通した現象、行動パターンと言えよう。

現に、これだけ文明が発達(?)し、毎日食うに困らぬはずの無宗教と自認する現代の日本人でさえ、日の出を拝み、お正月だ、七五三だ、お盆だ、お彼岸だ、お稲荷さんだ、道祖神だと言って、片っ端から手をあわせ賽銭をあげているではないか。

この、超自然な偉大な存在に対し何かを捧げることにより、それを偉大な存在、神の所有物とし、捧げた者との間に絆を結ぶ、その神聖なる行為と

していろいろな儀式が行われてきた。その中でも、生命を捧げる、捧げられた命が強い絆となり、祈りや感謝を示す最大の表現と考えられていくのは当然のことと言えるかもしれない。

人が農耕によって食を得るようになってからは、穀物さらにそこから得られた酒を捧げることが行われるようになったが、それ以前の生活からすれば、やはり生命、その象徴としての血を捧げる行為が主であったと考えられる。こうした行為が儀式として定着し、パターン化、つまりルールとして成立するとき、その捧げものは貴重な物ではあるにしても、比較的入手しやすい物でなくてはならない。

となると、農耕以前の状態であれば、比較的入手しやすい野獣すなわちイノシシ、シカといったもの、家畜としてはヒツジ、ヤギ、ウシ、ブタ等がこれにあてはまる。特に農耕を始めた人類では畑を荒らす害獣として捕らえられたイノシシが、またその繁殖力、飼いやすさとして価値からブタが、生け贄に供されてきた。他にウサギのような小動物もあるが、これはその価値(?)からして貴重さを認められなかったようである。イヌも同様と見られるが、他に食肉資源のない太平洋諸島では、それなりに貴重な生け贄として用いられているようである。

なお生け贄の漢字、犠牲の字の意味は、中国の歴史から来るもので「左伝」にも“五牲三犧”とあり、他にウシ、ウマ、ヒツジ、ニワトリ、イヌ、ブタを六牲とする。動物の色の純なのを犠とし、

ト(ボク)して吉を得て未だ殺さぬものを牲というとも記されている。犠牲は本来中国古来の祭儀に必須とされている供物であった。

また古代エジプトでもブタを生け贄にしていたし、バビロニアやフェニキアでも同様にブタを生け贄にしてきた。古代ヘブライでも予言者イザヤが現れるまでがそうだったし、ゲルマン民族の冬至の祭りにもブタは生け贄に用いられていた。

ブタの生け贄に関しては古代エジプトで行われていたことが知られているが、その後、エジプトでブタが忌避されるようになった後にも行われていたことが、我らがブタ仲間、通称とんじ氏こと元駐エジプト大使片倉氏の調査で判明している。すなわちヘロドトスはペルシャ人のブタの生け贄に関し、“彼らはブタの捧げ物をいかなる神に対しても行わないが、例外としてバッカス(オシリス)と月(ホロス)に対して同時に満月時にブタを犠牲にし、そのあと肉を食べる儀式を執り行う…”と記しているのである。なお、ヘロドトスより600年後にエリアンは“…エジプト人は太陽および月にとってけがらわしいものと信じている。したがって月祭を行うとき、一年に一度ブタを月に捧げる。しかし他のいかなる季節でも彼らはブタを犠牲にしようとするものはいない…”と、年中行事としてのブタの犠牲について述べている。

もちろん古代ギリシャ、ローマでは、農業の女神や家畜や狩りの女神への捧げものとしてブタは生け贄とされており、各地でそれぞれの神に、時には妖精にまでブタが捧げられていたのである。

なお筆者は以前、人類史の中のブタの扱われ方を知るための文献として、新・旧約聖書ならびにイスラム教のコーランの日本語訳を約一年半かけて読んだことがある。精読ではなく、ブタに関わ

る記述をすべてチェックするための作業であったが、旧約聖書の中に、この生け贄について、さらにその方法から手順につきくどいまでに詳しく述べられているのに驚かされたものである。

たとえば創世記22には、神がアブラハムの信仰と従順さを試すため、その愛する息子のイサクを犠牲にするよう命じる部分がある。アブラハムは祭壇を築き、犠牲を焼く薪を積み上げ、ついに息子を縛って薪の上に横たえ、刀をその胸に突き立てようとする瞬間、天から神の使いの音が響く。“その子に手を下すな、あなたが神を畏れる者であることが今わかったからだ”言われてみるとすぐそばの木の枝に雄ヒツジが一頭角をひっかけてもがいている。これこそ神の用意した生け贄だと知って、アブラハムはそのヒツジを完全に焼き尽くして捧げるシーンが述べられている。何とも凄まじい試練の一節である。

さらにレビ記(礼拝規定)になると、各種の儀式から病気、産後のけがれを浄めるための犠牲の扱いについても詳しく述べており、その対象もウシ、ヤギ、ヒツジからハトと多種にわたっている。

またイスラエル放浪記28に至っては、神様がモーゼに命じた言葉として“祭壇で焼いて捧げる生け贄は、わたしの食物だ。わたしはそれを楽しみにしている。だから毎日きちんとわたしが教えた通りに捧げなさい…”とまではっきり言っている。

ただし、聖書の中の生け贄にはブタはない。モーゼの頃にはすでに中近東には乾燥化が進み、ブタの飼育は大都市部、つまり残飯の出る所以外は困難な状況になったから、と筆者は見る。この生け贄の扱い方については、聖書に見るように、焼き尽くす方法、それに生命のシンボルとして血を用



いる、さらに肉を食べる等、いろいろな方法がある。

「ブタ礼讃」(H・Dダネンベルク著、福井康雄訳、博品社刊)には、“仔ブタは清めの生け贄として使われた。人を殺した者の手には仔ブタの血がたらされ、そのあと水で清められた。ギリシャの悲劇詩人アイスキュロス(紀元前525～456年頃)の「オレスティア」では、オレステスが若いブタの血で母殺しの罪を清められている”と述べている。

さらに興味深いのはそれに次ぐ記述である。すなわち“古代ローマの農民は、収穫の前にはブタを生け贄に捧げた。また決められた春の日(4月2日)には、ローマ人はヴィーナスをあがめて、冬が終わり大地が開かれるのを願って、雄ブタを生け贄に捧げた。4月のAprilという名称はラテン語でaper=雄ブタ, appetit=開いた、に由来する。〈中略〉昔は同盟や条約を結ぶときさえ、ブタの生け贄で保証されるのが珍しくなかった”

ともあれ陽光輝く春4月、このAprilの語源にブタがからむとは何とも楽しい話ではないか。このヴィーナス女神にブタを捧げる習慣は、アルゴス、テッサリ、キプロス、小アジアの各地においても行われていた。この他ブタを生け贄にして、その内臓の様子から神のお告げを占うことが、エトルリアや古代ローマの神官(腸卜師)の仕事であったとも述べられている。

とはいえ、ブタの生け贄を厳しく禁じている地域も多かった。それもかなりブタを飼育している所である。この点でもブタと人間の関わりに見られる何とも言えぬ矛盾が出現するのである。

こうした「生け贄」つまり生命を捧げる行為では、最高のものとして人命を捧げることが考えら

れる。新大陸のアステカでは毎月のように、幼児の心臓を、奴隷や捕虜を殺してはいだ生皮、女性や若者の首など、次々と人身供養を行っていた。またインドでも今は水牛に替わっているが、穀物の豊穰を願って以前は大地母神に人間を捧げた。チベットでも以前はベーン(ベンの)の神々への人身御供が行われていたものが、仏教伝来以後は練り粉製の像に変わる等、古代での人の生け贄はかなり一般的に行われていた。

だがそのうち、人は農耕を覚え、家畜を得るに従って生け贄は家畜に移行する傾向が出てくる。そしてその扱いも、焼き尽くす、血で清めるなどから、皆で食べる方向に変わってきているように思えてならない。

これはあくまで筆者の想像に過ぎないが、現に家畜の肉としてはやはりブタが最も柔らかく美味であり…霜降りなどの完全な肥育牛は世界ではむしろ例外に属する…これが生け贄にされるのは、皆が美味にありつける得難い機会、そのための儀式、冠婚葬祭と見られてきた部分もかなりあるのではないかと類推、いや邪推が頭をもたげてくるのである。

現にブタを徹底的に忌み嫌うはずのエジプトで、前述したようにヘロドトスは例外的にブタを生け贄とし、そのあと肉を食べると述べているのは、やはりその美味ゆえとしか考えられない。もしかするとこれは儀式にたずさわる者の特権として、表向きは仕事として、その実大きな楽しみとして執り行われていたブタ料理ではないかといいついて考えてしまうのである。

いや、ブタ好きがゆえに脱線してしまった。ここまで述べてくると読者の中には、生け贄とは狩猟民族または牧畜民族の習慣で、われわれ農耕民

族にはあまり関わりがないとお考えの向きもあるかもしれない。

だが日本でも生け贄は存在した。たとえば宇治拾遺四に“三河国に、風祭という事をしけるに、いけにえという事に、猪をいけながらおろしけるを見て”とあり、和訓栞の生け贄の説明には“本邦にては賀茂の鯉、熊野の鯛、…釈尊の三牲は、大鹿・子鹿・豕を用いられる由、延喜式に見えたり”と述べている。

また、生け贄を殺して血をすすり合って盟約を結ぶ中国の儀式を日本でも行っていたことが、太平記九、足利殿御洛時に“異国より吾朝に至るまで、世の乱れたる時は、霸王諸侯を集めて、牲を殺し、血をすすって、二心なからんことを盟う。今の世の起請分是なり”とある。中国ではこの牲はウシの左の耳から得た血であるとされているが、

日本では何の血であったか判明していない。

それはそれとして、日本でも人の生け贄つまり人身御供は行われていた。謡曲、能楽の曲名に「生贄」があり、娘を連れた旅人が駿河の富士御池に来たとき、その娘が生け贄のくじに当たり、大いに嘆き悲しむ。それを富士権現の使い、日の御子が現れて親子ともに助かるというストーリーで、世阿弥の作と伝えられる。この他、橋や堤防を築くとき、人柱として河の神への生け贄として水底に生きた人間を埋めることも多く行われていた。

世界の民族が考える、超自然な力、神への畏れはどこか共通するものがあると思わざるを得ず、その中にも人類の良き友としてのブタが、時にはイノシシが、顔を出してくることに改めて興味をおぼえるのである。